

顕著化するIT人材不足問題、その解決策とは

# UNIRITA

## Magazine

ユニリタマガジン

11

NOV 2015

### IT人材不足問題の 解決に近道なし

ソーシングを目的とした業務可視化と  
ナレッジ蓄積の推進

ユニリタの新ビジネスコラム

～人工知能編～

ソフトウェアプログラマは必要なくなるのか

業務要件定義支援ソリューション  
「BiRDSS」のご紹介

ウェビナー ユニリタ 新企画!  
動画で紹介されている講演資料の  
一部ダウンロード提供を開始!

システム管理者の会/Beaconユーザ会

パートナー様ご紹介  
株式会社オービックビジネスコンサルタント

ユニリタ  
イメージキャラクター  
ホラン千秋

# IT人材不足問題の解決に近道なし

## ソーシングを目的とした業務可視化と ナレッジ蓄積の推進

### IT人材不足の社会問題

近年、IT産業では、人材不足が再び騒がれ始めています。2015年9月4日付の日本経済新聞の一面に、「アジア人材の呼び込み “政府、東大や企業と連携 就職念頭に留学”」という記事が出たことは記憶に新しいです。政府が中心となり、日本のIT人材不足をアジア人材により補い、解消する取り組みが今始まるようとしています。

以前からIT人材不足の原因とされてきた、少子化による若年労働者の減少や団塊世代の定年退職について、ユニリタグループのお客様企業でも2012年頃から対策チームを作り、真剣に対策を議論して準備するなど、常に意識されてきたテーマです。

今後の新卒・経験者採用が難しくなることでの次世代育成の課題や、第一線で力を発揮していた有識者が退職することによる業務影響は、予測通り2015年にIT人材不足が社会問題としてクローズアップされ、対策が求められている段階です。この問題を解決するためには、IT担当者の働き方を根本から見直し、組織や役割の見直しを含め、変革し続ける体制に生まれ変わることが必要であり、それは待たなしの時期に来ていると言えるでしょう。



### IT人材不足対策にソーシング推進を

IT人材不足対策の一つとして、ソーシングの見直しを進めている企業が増えています。IT部門全体の業務について、IT人材不足をきっかけにIT担当者が今後も業務の核として保持すべき「コア業務」と労働集約型作業（手順書やマニュアルがあり、定型業務となる仕事）を「ノンコア業務」として外部ソーシング（イン/アウトは問わず）を推進するといった対策です。

ソーシングを推進した結果、「コア業務」として新たなプロジェクトへの参画やマネジメント業務を通じて、貴重なIT人材の有効活用と価値を高め、品質とコストの最適化を行う業務効率化の取り組みを進めることができます。

### ソーシング活用の3つのポイント

ユニリタグループでは「Change Your Work style」をミッションとして掲げ、企業の働き方を変革するために、ソーシングを検討する企業への支援を強化してきました。特にサービスデスクのソーシング推進については、トライアル・アンド・エラーを繰り返しながら取り組んだ経験から得た、ソーシングを上手く活用するための3つのポイントを以下にご紹介します。

#### ポイント①

#### 業務可視化のすすめ



ソーシングを検討するには、業務の可視化が必要です。サービスデスクは、システム利用者からの問い合わせや障害対応、依頼書対応等を中心に業務遂行する機能です。まずは、サービスデスクの業務内容を整理し、明確にする対応が必要です。

これまで蓄積してきた運用ナレッジやログ等の記録をもとに担当者へのヒアリング、業務観察を行います。一つひとつの業務を丁寧に洗い出した結果、どんな業務があり、どんな頻度で実施されるのか、業務の緊急度は、優先度は、考慮しておくべき工数は、業務遂行に必要な担当者のスキルは、障害時の影響範囲は、マニュアルは存在するか、担当者はどんな評価指標で業務遂行しているのか、IT担当者が課題や問題に思うことは何か、担当者の悩みはどんなことなのか等の観点で業務確認し、業務一覧を作成することを推奨しています。

このような業務一覧を作成する大きな理由は、業務に漏れなく、後戻りのないソーシング計画とその実現について検討し、ソーシング後のマネジメント業務において的確な管理ポイントを見出すためです。

#### 業務可視化のWHYを明確に

業務一覧を作成する上で大事なポイントは、なぜ今業務可視化に取り組むのかを関係者に明確に説明することが必要であり、既に業務をソーシングしている場合は、現在のパートナー企業との関係性に十分に注意しながら、互いに良好な関係づくりを心掛けることもソーシング計画を進める上での重要成功要因と言えます。

#### ポイント②

#### サービスデスクのコア業務設計



サービスデスクの業務一覧をもとに、IT担当者が今後も継続して担当する必要がある「コア業務」とソーシングを積極的に推進すべき「ノンコア業務」を選定し、分類します。

選定・分類するために必要なインプット情報は、今後のシス

テム化計画やシステム再構築等の計画です。数年内に無くなる業務や既に工数負荷が高いことを理解し、今すぐにもIT担当者の工数を別のプロジェクトや開発業務に転換したい場合に「ノンコア業務」としてソーシングを積極活用するための業務整理計画を立てます。

一般的にサービスデスク業務は、「ノンコア業務」として捉えられる方向性が強くありますが、ソーシング活用後の「コア業務」として、ITサービスマネジメント業務を新たに設計し直し、業務として担当する必要性が議論されています。サービスデスクの運用管理情報を一つに集約できるという特性を活かし、業務一覧の管理や引継ぎ計画や運用管理データを元にした分析、評価の取り組みがサービスデスクの新たな業務として検討されています。サービスデスクのITサービスマネジメント実現のために、今まで時間をかけて取り組んできた運用管理レポート作成を始め、グラフ化の工数、運用状況をコメントする活動等、システム利用者向けの提案活動などにサービスデスクの新たな「コア業務」を見出し、設計することも重要です。

## 業務プロセス管理がビジネスへの価値を示す

サービスデスクがビジネスの観点で貢献するために、今後は変更管理や構成管理を担うべきとの声も多くあります。これまでOA機器やサーバ等のインフラ、ネットワークを変更管理の対象として見てきた状況から、今後はビジネス部門の業務プロセスについても対象に含め、管理していく方向性が議論されています。構成情報の最新状態を維持、メンテナンスする活動は、変更管理を通じてインフラ範囲だけではなく、ビジネス範囲にまで拡大し、変更依頼が発生する度に業務プロセスが変更される状態を作り出すことが必要になります。ビジネスや利用者ニーズの変化を予測でき、業務に対する素早い対策や業務部門に対する事前の提案が可能となることで、サービスデスクの新たな存在価値を示すことができます。

## ポイント③

### ナレッジ蓄積の強化



多くの企業では、IT担当者の属人化が進んでいたり、パートナー企業にノウハウがあったりと、企業としてのナレッジ共有や蓄積が出来ていない状況が想定されます。その中でソーシング検討が開始される現状を見ると、ソーシングした際の費用やソーシング後のマネジメントの実現可否については、ナレッジ蓄積の状態が判断のポイントになります。

ナレッジ蓄積が十分でない場合、初期段階でシステム利用者からの問い合わせや障害対応、依頼書対応等について、インシデント記録を徹底的に行い、一次解決、エスカレーション後の状況について徹底的に記録を行う取り組みが必要です。この取り組みは、初期段階のソーシングの一環で実施し、業務可視化を実施する中で、手順書やマニュアルを作成する等、一定期間ナレッジベースを作成し、同時にソーシング後の業務理解やサービスデスクの業務習熟度を引き上げていく活動を推進することに繋がります。

## ITサービスマネジメントツール+ 入力担当者をアサイン



ナレッジベース作成は、ITサービスマネジメントツールと共に選定したツールを活用した運用が出来るパートナー企業の選定を推奨しています。

ITサービスマネジメントツールを導入する場合、活用した効果をイメージして購入するが、効果を出すためには、現場での定着が必要になり、最低でも1年から3年の活動が必要になります。サービスデスクのソーシング活用においては、インシデント登録からグラフ化までの活動をソーシングすることでITサービスマネジメントツール購入後からツールを活用した訓練や効果を出すまでの助走期間を省き、直ぐに求める効果を出す取り組みに着手できることも大きなメリットになると考えます。

ナレッジ蓄積は、ソーシング活用スピードの早期化を実現するだけではなく、ナレッジベースの運用を目指す中で次世代担当者の育成や高齢人材、女性、グローバル人材の活用の前提として必要な取り組みであることは間違いありません。これからのお客様企業の働き方変革のため、ナレッジ蓄積を上手に進め、ソーシングの推進に取り組んでいただきたいと思います。

## ユニリタグループの ソーシング支援サービスについて

ユニリタグループでは「Change Your Work style」をミッションとして掲げ、ソーシング支援サービスを提供しています。現状のアセスメントから計画作成までのコンサルティング、ITサービスマネジメントツール(LMIS on cloud)や業務プロセス管理ツール(ARIS)の提供から各種ツールを活用した業務定着までをアウトソーシングにより対応し、早期に効果を出す活動に注力した支援を展開しています。

今後もさまざまな業務に対応できるソーシング支援サービスとして幅広いお客様企業にご利用いただけるようなサービスに成長させてまいります。ユニリタグループのこれからのソーシング支援サービスにご期待ください。

### 担当者 紹介



営業本部  
コンサルタント

宮下 貴行  
全能連マスター・マネジメント・コンサルタント

ユーザ企業より、ピーエスピーソリューションズに入社後、7年間コンサルタントとしてお客様のIT戦略や企画立案を中心にコンサルティング活動を実施。2015年4月にユニリタ転籍後は、コンサルティングやアウトソーシングを中心としたビジネスを展開するコンサルタントとして、お客様の課題や問題の解決を目的とした提案活動を行っています。お客様の視点に立ち、効果のあるソリューションをご提案しています。



# 人工知能時代の今、 ソフトウェア技術者が考えなければならない事 ソフトウェアプログラマは必要なくなるのか？

近頃、人工知能、機械学習という言葉をよく耳にするようになりました。将棋やチェスなどで人間を打ち負かすようになった人工知能。コンピュータ自身が学習する機械学習の手法のひとつ、「ディープ・ラーニング」により、加速度的に進化を続けています。

このままコンピュータが進化を続けていくと「ソフトウェアプログラマの仕事はなくなるのか？」。本コラムでは、これからのソフトウェア技術者が、今ある業務の中でどの部分を人工知能や機械学習に置き換える事ができるのかを考察していきます。

Googleが社名をAlphabetという会社に変えました。正確には、変わったのではなく、新しい会社を作り、Googleがその100%子会社になっています。TechCrunchは、「なぜ変えたのか？」という問いについて、Googleの協働創業者ラリー・ページ氏の次のようなコメントを掲載しています。

Why the change? Well, Page wrote that the structure will allow the company to “run things independently that aren’t very related” while also keeping “tremendous focus on the extraordinary opportunities we have inside of Google.”

(<http://techcrunch.com/2015/10/02/google-becomes-alphabet/#.psskqbhZzA>より)

Googleは検索エンジンの会社からさまざまな事業モデルをもったIT会社に生まれ変わろうとしています。

昨今人工知能が一つのブームとなっていますが、Googleの野望の1つにこの人工知能があります。ここ20年程を見ても、IT業界では数年に1回のペースで技術革新が起きています。90年中頃から後半にかけてはインターネットやjava、2000年初めにはXMLや仮想化、2000年半ばからはクラウドやスマートフォン、そして、現在の人工知能です。

これらの最新テクノロジーは、突然現れたかのように思われますがそうではありません。例えば、java、仮想化、クラウドを見ても、これはコンピュータ技術者たちが追い求めてきた仮想化の歴史をたどってきています。これらの技術が出てきたときに技術者は、「パフォーマンスが出ない」という反応が多かったと思います。しかし、今ではそんな反応をする人は少なくなりました。問題はまだまだありますが、それを超えた価値があるからです。そしてその価値は、技術者達の叡智の集大成でもあります。

## 担当者紹介



### 戌亥 稔

執行役員  
プロダクト事業本部  
Be.Cloud グループ長

クラウド事業を担当している野球とゴルフ好きの2児の父親です。ゴルフのスコアはあまり良くなりませんが、最近飛距離が伸びました。iPhoneは2008年に3Gが出てから、ずっと使っているガジェット好きの技術者です。

## 木を見て森を見る

前述の例は、「木を見て森を見ず」となっていたと思います。我々技術者は木を見る事が出来るので、一般の人たちとは違った反応をするのは当たり前です。しかし、この特徴を逆手にとって、「木を見て森を見る」必要があります。クラウドの歴史はコンピュータが生まれた頃から始まっていたのです。そしてこれは、まだまだ続きます。

コンピュータプログラマが必要なくなる日。そんな時代はやってくるのでしょうか？「今後20年でロボットやコンピュータに代替される可能性の高い仕事」や「子供が大人になる頃、その65%はまだ存在しない職業に就く」など、人間の存在を脅かす記事が多い中、ソフトウェア技術者ももう一度この事に正面から取り組む必要があると思います。

## ルールベースの意思決定

1992年、私は修士卒業論文で“The recognition of imperfect strings generated by fuzzy context sensitive grammars”を書きました。ちょっと難しく聞こえますが、簡単に言うと、「文法の間違っている文章を解析して、それを認識するのにファジー理論を使う」ということです。当時は人工知能冬の時代でしたが、コンピュータにある特定の分野ですでにわかっているルールを記述して、それを知識ベースとし、コンピュータに意思決定をさせようとしていました。そのルールをなるべく自然言語に近い形で書くために、自然言語の曖昧性をコンピュータに認識させるのにファジー関数を利用するというのが私の論文でした。

ルールベースは知識の集まりです。ルールが誤っているとそのルールから導き出した結果も間違えます。したがって、ルールは完全になるまで、更新をしなければなりません。例えば、言語解析をする場合には、文法などをルールとして記載しますが、そのルール通りに書けば、コンピュータはその言葉を理解してくれます。しかし、人間が話す言葉はルールを無視した曖昧な表現が多いため、なかなか理解してくれません。そういう曖昧性をどのように処理するかがテーマであったのです。

## コペルニクスの転回

コペルニクスってご存知ですよね。1500年にもわたって信じられてきた天動説を覆した人です。人工知能の現場でもそれが起きました。前述したルールベースではなく、多くのデータを分析して、コンピュータが、自身で学び、特徴をつかんでいくことにより、物事を理解していく方法です。これは機械学習と呼ばれています。これがさまざまな分野で利用できるということで、現在の人工知能ブームとなっています。ルールベースでの判断ではなく、大量データを見て、学び、それにより判断するという方法が使われています。「コンピュータが仕事を奪う」の著書である新井紀子先生が「テラを聞いて十を知る」という表現を使っています。

この方法は情報を取得しやすくなってきたために起きています。ネットが発達してきて約20年、この間にネットワークがいたるところにはりめぐらされ、帯域も広がりました。IoTを使って、特殊なデバイスを作成し、情報をとる事もできます。スマートデバイスからの情報は瞬時に世界中に共有されます。実はコペルニクスの時代にも望遠鏡が発達したことで、それまでの天動説の理論が発達した頃とは明らかに情報の量が変わりました。ガリレオは望遠鏡を使ってさまざまな星の観察をしたそうです。今まで観察していなかった星まで観察することが可能となり、天動説から地動説に大きく流れが変わっていきました。



## プログラマの仕事はなくなる?

冒頭での「プログラマの仕事はなくなるか?」という疑問に戻しましょう。私の答えは、「既に一部置き換わっている」です。コンピュータプログラミングとは、コンピュータにやってもらいたい仕事をアルゴリズムとして書くことです。ルールベースはそのアルゴリズムを外から与える事で、プログラミング言語で書くコードを小さくし、アルゴリズムを変更したい時には、そのルールを変更・追加・削除することができる方法でした。ルールベースにおいてもすでにプログラマの一部の仕事は代替されていますが、機械学習により、そのアルゴリズムを書く必要がなくなったことで、さらにプログラマの仕事が代替されます。また、コンピュータは自ら学んでアルゴリズムを更新してくれます。したがって、既に、プログラマの仕事は大幅に置き換わる可能性があるということを意識した方がいいでしょう。マシン言語がjavaの様な人間が理解できる言語に置き換わり、そしてjavaは、コンピュータが勝手にロジックを作ってくれる機械学習に置き換わる可能性があると考えてみてはどうでしょうか?

## 今ある業務の中で、どの部分を置き換えることができるのか

さて、それではソフトウェア技術者は、どのように考えればいいのか?今ある業務の中で、どの部分は置き換える事ができるのか?まずは、自分の頭で考えてみましょう。

「会計処理の科目の振り分けを人工知能で自動化する」というのを、先日、経理部門の人に話したら、「それ欲しい」という反応でした。「システムトラブルが発生した時に、どこに問題がありそうか予測する」、これはシステムに関わっている人だとみんな欲しいですね。トラブルが発生した時には過去のトラブルやインターネット上の情報を検索しているプログラマが多いと思いますが、コンピュータによって自動化することができるでしょう。

少し頭をひねるといっばい出てきます。もちろん、それを実現するには、テラのデータが必要です。テラのデータを手に入れる方法を考えなければなりません。Googleが自動運転車を作って公道を走らせていると言われていますが、そのデータはGoogleのクラウドに保存され、知識として保有されています。そして、この知識が重要な資産となります。

システムを運用していく中で、資産が増えていきます。これはDevOpsでもあります。DevOpsは開発のDevelopmentと運用のOperationsを組み合わせた造語であるため、開発と運用の融合などのようにイメージされますが、その本質は「運用していく中で、システムの価値が上がっていく」ということを意味しています。

## そして、ソフトウェア技術者が考えなければならないこと

GEがインダストリアルインターネットというコンセプトで自社のハードウェアとクラウドサービスを組み合わせてサービス提供するコンセプトを考えて着実に実行をしていることはご存知だと思います。その開発のパートナーとして、アジャイル開発で有名な米ピボタル社が選ばれています。アジャイル開発やDevOpsは人工知能時代に必要な開発と運用の重要な概念となります。



IoTやスマートデバイス、SNSを使ってどのようにデータを収集するかを考える必要もあります。データの分析は1行1行プログラミングしていると時間がかかるので、できるところは機械学習にしましょう。機械学習のソフトはプログラミング言語と同じと言うような、コペルニクスの転回をしてみてもいいでしょうか?

今、ソフトウェア技術者に必要なのは、過去からの技術で重要なものを使いながら、自ら新しい技術を習得し、なるべく早く試して、実際に運用してみる事だと思います。

業務要件定義の技術を身に着け、IT 部員をビジネスアナリストへ！  
要件定義の成果物を体系化し、費用を資産に転換

ビジネスアナリストとは、業務要件に基づいて開発プロジェクトの指針を導き出し、正しい方向に向かってプロジェクトをリードする人材です。また、IT アーキテクトと違い、ビジネスや組織活動の全体最適化の実現も視野に入れて構造改革を推進する、企業にとって非常に重要な位置づけを持っています。

今回は、ビジネスアナリストに必要とされる「業務要件定義」を支援するソリューション「BiRDSS」をご紹介します。

「業務要件定義で、何をどうすればいいのかわからない」というお悩みはありませんか？

業務要件定義支援ソリューション「BiRDSS」は、「ソフトウェア開発のV字モデル」上での業務要件定義、統合テスト（受入テスト）で役割（ロール）ごとの作業手順、成果物（モデル、ドキュメント）、作業規約を体系的にまとめ、高品質・低価格・短納期の要件定義作成の実現を支援します。

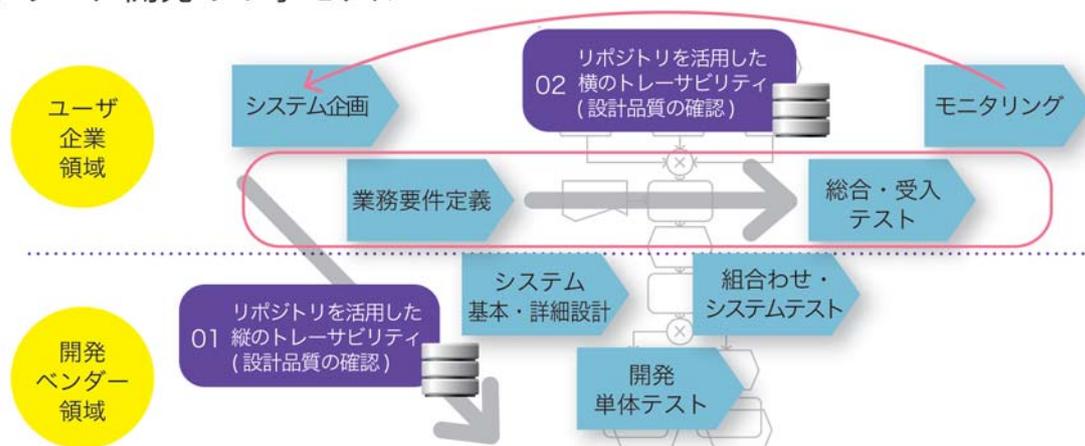
教育・コーチングを通して、IT 部員からビジネスアナリストへの転換に必要なスキルアップを実施します。

IT システムの導入費用を「使える資産」へ

プロセスモデリングツール「ARIS」の「業務プロセスのリポジトリ管理機能」を活用し、業務要件定義成果物の縦横の整合性を図り、効率的で精度の高い業務要件定義工程を支援します。

要件定義、総合テストを通して完成された成果物を継続的に維持管理し、保守・運用フェーズでの資産として活用することができます。

## ソフトウェア開発のV字モデル



●「BiRDSS」に関する詳しい情報は、「ユニリタホームページ」をご覧ください

BiRDSS ユニリタ



ウェビナー  
ユニリタ

## 動画で紹介されている、 講演資料の一部ダウンロード提供を開始！

常時 40 タイトル以上の動画を配信中のウェビナーユニリタより、視聴数の多いプログラムで紹介されている講演資料のダウンロード提供を開始します。課題解決やプロダクト&サービス、エバンジェリストと、各コンテンツから随時展開していく予定です。簡単なアンケートにお答えいただくだけでダウンロードが可能です。ぜひ、動画の視聴とあわせてご活用ください。

 11 月追加予定の新規コンテンツのご紹介！

「効率的なアプリケーション構築におけるビジネスプロセスマネジメントとは」

今回は、経営が求める IT システムを定義し、構築の要とも言えるビジネスプロセスマネジメントに着目しました。また、IT システムが自社のビジネスの強みを実現するために必要なポイントを分かりやすく、「よい ToBe」「悪い ToBe」に分けて説明し、その本質を深堀します。



株式会社ユニリタ  
黒澤 亮祐

●最新の配信情報は「ユニリタ ホームページ」をご覧ください

ウェビナー ユニリタ



## リーダーズミーティング大阪開催決定！ 参加申し込み受付中

システム管理者の会では、システム部門の組織力向上を目的に、リーダークラス以上のマネジメントに携わる方を対象として『リーダーズミーティング』を開催しています。このリーダーズミーティングが最初に開催されたのは2009年12月。事業の成長にはシステム部門の組織力向上が不可欠であるという思いから、「マネジメントカンファレンス」という名称で開催しました。テーマは多岐に渡り、ITコストの削減、クラウドコンピューティングなどの技術的なテーマ、またメンタルヘルスや女性とITなどの恒常的なテーマなど、マネジメント層の課題にテーマを定め、各界のプロフェッショナルを講師としてお招きし、ご講演いただいています。

そのリーダーズミーティングを、11月20日（金）に大阪で開催します。今回のテーマは「チームマネジメント」。あなたのチームは、「突発的な業務が多く重要な業務が後回しになってしまう」、「特定の方に業務が集中してしまう」といった問題を抱えていますか？本セミナーでは、疲弊したチームを立て直し、チーム本来

の力を取り戻すためのチームマネジメントについて解説します。

今回の講演者は、東京開催に引き続き FMIC（Future Management & Innovation Consulting Inc.）のチーフコンサルタント 宮澤 毅氏です。宮澤氏の講演ではチームマネジメントに関するノウハウや事例が聞けるほか、簡単なワークショップで講演内容を模擬的に体験することができます。また、セミナーの後には軽食付きの懇親会を予定しています。チームマネジメントを行う上で抱えている問題や解決策について、講演者や他社の方と情報交換することができます。ぜひご参加ください。



- 詳しくは、「システム管理者の会ポータルサイト」をご覧ください。

システム管理者の会



## 旬なITの話題をクローズアップ！ 「ITフォーラム」のご紹介

Beacon ユーザ会では、研究会活動だけでなく、会員同士の交流や情報収集のためのイベントを実施しております。今回はその中の一つである「ITフォーラム」の紹介です。

「ITフォーラム」は東日本・中部・西日本・九州の各地区で、それぞれ年2-3回ずつ開催しています。当会会員のシステム事例や、それぞれの地域ごとの旬な情報技術を中心としたテーマについて講義を行ったあと、講師の方と参加者で討議していただきます。座学だけでは得られない、ユーザ相互の情報交換の場

として、各社の生の声をお聞きいただける貴重な機会としてご利用いただけます。とりわけ、当フォーラムでは黎明期にある情報技術や理論をテーマとして取り上げさせていただくことも多く、導入前の情報収集に役立つと好評をいただいています。

今後も、日本国内でも本格的な活用が始まったIoTになどについて、様々な視点からクローズアップして開催する予定ですので、ぜひご参加ください！

### ITフォーラム次回開催予定

2015年12月4日開催予定  
第40回中部ITフォーラム

来年1月から本格的な導入が始まるマイナンバーについて、専門家の方をお招きして、民間事業者の対応について詳しく解説していただきます。

講師：茶谷 達雄氏

都市情報システム研究所長、JUAS認定情報システムコンサルタント、  
現在、総務省電子政府推進員、港区・杉並区個人情報保護審議会会長ほか

2009年10月開催

『iPhoneが切り拓くモバイルクラウドコンピューティング』

iPhoneが初めて日本で発売されたのは2008年7月でした。ITフォーラムではソフトバンクモバイル社から講師をお招きし、いまでは当たり前となったモバイルクラウドコンピューティングについてお話いただきました。



### これまでのITフォーラムの一例

2013年7月開催

『IT断食』のすすめ

2011年に発行され、現在も業務効率化を目的に導入する企業が後を絶たない『IT断食』のすすめ。著者である山本孝昭氏を講師にお招きし、IT断食について参加者同士で討議しました。



2003年9月開催

『オープンソース・ビジネスの動向』

いまでは国内企業の業務システムにも定着したオープンソース・ビジネスについて、いち早く取り上げました。



- 詳しくは、「Beaconユーザ会ホームページ」をご覧ください。

Beacon ユーザ会



## 基幹業務パッケージ「奉行シリーズ」とETLツール「Waha!Transformer」の連携で実現するパッケージ型業務システムの新たな付加価値とは？

OBC(オービックビジネスコンサルタント)では、企業経営の根幹となる財務・人事労務・販売管理を中心に、多様な業種・業態に対応する業務パッケージソフトウェア「奉行シリーズ」を開発し、企業の業務効率化・生産性向上に貢献しています。今回は、一般的にパッケージシステムの弱みとなる周辺システムとのデータ連携の課題解決の取り組み事例をご紹介します。

### パートナーシップにより生み出される付加価値

これまでの基幹業務システム構築では、業務改善や効率化を目的に自社の要件に適したシステムを導入するお客様が大半でしたが、近年では段階的な消費税改正、マイナンバー制度の施行、IFRS導入をはじめとした制度対応など、企業を取り巻く環境の変化に迫られ、システム刷新を検討される企業も多くあります。お客様のニーズも変化しており、将来的な環境変化に柔軟に対応できるパッケージ型の調達主流となっています。

奉行シリーズではそのようなニーズに対応するため、財務会計・税務・人事労務・販売管理・在庫管理など、必要な業務をパッケージとして選択可能とし、部分最適化およびコスト最適化を実現しています。しかし、部分最適化を実現する場合、必ず課題となるのが、周辺システムとのインターフェースの対応でした。

### 【各インターフェース対応におけるメリットとデメリット】

インターフェース対応	メリット	デメリット
各システムに合わせたファイルによる手動連動	インターフェース開発費用の抑制	ファイルの作成、ダウンロード・アップロードの業務負担
システム間連動プログラム開発	他システム同士の連動による効率化	・プログラム開発費用 ・メンテナンスコスト

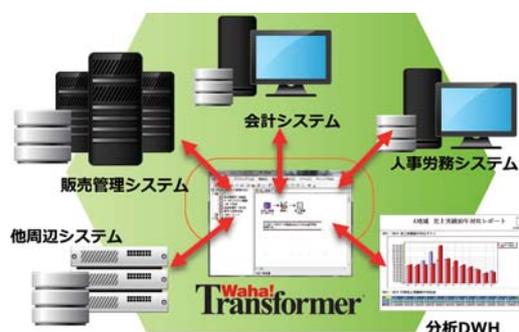
従来の提案では、部分最適化を実現するために、コスト負担や業務負担が増えては、せっかくのパッケージによる利点を損ねることとなります。そこで手を差し伸べてくれたのがユニリタでした。

ユニリタのETLツール「Waha!Transformer」を奉行シリーズのインターフェースエンジンとして組み込むことで、システム間の連携課題を解決し、奉行シリーズをより有効に利用いただく事ができるようになりました。

当社の主要顧客層である中堅中小企業では、一般的にETLツールは高額・専門知識が必要といった敷居が高いイメージが強いも

のでしたが、お客様が導入し易いよう「ETLツール for 奉行」としてリリースし、パッケージのメリットである低価格・短納期・高い操作性を付加価値として実現しています。

### 基幹業務パッケージ「奉行シリーズ」× ETLツール for 奉行



### 今後の展望

当社は「人と業務をつなぐことで企業業務全体の生産性をあげる」をコンセプトとした「奉行10シリーズ」を2015年10月から提供開始します。奉行10では、奉行Linkitサービス(業務SNS)や奉行Myスペース(アシスタント型オペレーションツール)、自動アップデート機能、Office連携サービスを実装し、企業内の情報連携・共有化の向上を実現します。また、クラウドとオンプレミスのDUALモード対応やWindows10対応等の環境変化への対応、パッケージ特有のサポートライフサイクルの概念を無くしたロングライフサポート(LLS)の提供など、今までにない新しいパッケージシステムとなります。

“つなぐ”をキーワードとしたユニリタとの協業コンセプトと当社の新製品「奉行10シリーズ」の相乗効果により、多くのお客様の課題解決と事業成長に貢献してまいります。

基幹業務システム  
**奉行10シリーズ**

株式会社ユニリタ [www.unirita.co.jp](http://www.unirita.co.jp)



本社	〒108-6029 東京都港区港南2-15-1 品川インターシティA棟	TEL 03-5463-6383
大阪事業所	〒541-0059 大阪市中央区博労町3-6-1 御堂筋エスジービル	TEL 06-6245-4595
名古屋事業所	〒451-0045 名古屋市西区名駅3-9-37 合人社名駅3ビル(旧48KTビル)	TEL 052-561-6808
福岡事業所	〒812-0013 福岡市博多区博多駅東2-2-2 博多東ハニービル	TEL 092-437-3200

ユニリタグループ 株式会社アスペックス / 株式会社ビーティス / 株式会社データ総研  
備実必(上海)軟件科技有限公司 / 株式会社ビーエスピーソリューションズ